男子世界トップレベルの試合における攻撃結果が相手のカウンター攻撃に与える影響

徳田　廉之介（201711978、ハンドボールコーチング論）
指導教員：會田　宏、藤本　元、山田　永子

キーワード：カウンター攻撃、生起率、テクニカルミス

【目的】

ハンドボール競技における攻撃方法は、速攻と遅攻の 2 つに大きく分けることができる。速攻は相手の防御システムが整わないうちに攻め込む方法である。素早く攻防を切り替え、短時間で得点をあげることができる有効な攻撃手段である。

先行研究から、男子世界トップレベルの試合では速攻は重要な攻撃方法であり、その中でも特に 1 次速攻は有効な方法であることがわかった。しかし、世界トップレベルの試合での速攻の重要性に関する研究に比べると、攻撃結果が攻撃直後の相手のカウンター攻撃に及ぼす影響について明らかにしようとした研究はほとんど行われていない。

本研究では、男子世界トップレベルの試合における攻撃の結果が相手のカウンター攻撃に与える影響について明らかにし、相手のカウンター攻撃において失点を防ぐための提言を実践現場に行うことを目的とした。

【方法】

EHF チャンピオンズリーグ 2018/2019 シーズンと 2017/2018 シーズンの試合を標本とし、分析対象は、相手のカウンター攻撃に繋がった 985 シーンであった。攻撃局面、ミスエリア、シュートエリア、攻撃結果、相手のカウンター攻撃局面の 5 項目を分析した。

分析結果についてはカイ 2 乗検定と残差分析を用いて比率の差の検定を行った。有意水準は 5%未満とした。

【結果と考察】

⑴攻撃がゴールで終了した場合、相手のカウンター攻撃局面は 1 次速攻が有意に少なく、遅攻が有意に多かった。シュートミスで終了した場合、1 次速攻と 2 次速攻が有意に多く、遅攻が有意に少なかった。

⑵攻撃がテクニカルミスで終了した場合、相手のカウンター攻撃局面は 1 次速攻が有意に多く、遅攻が有意に少なかった。ターンオーバーと相手のカウンター攻撃局面との間に有意な関係は無かった。このことは、チャージングが起きた時にディフェンダーが 1 人、もしくは 2 人倒れることが多く、素早く速攻に繋がるパスを出すことができないことが理由であると考えられる。

⑶ エリア別シュート成功率は、ポストシュートが最も高く、次いで、7mスロー、カットインシュート、サイドシュート、ミドルシュート、ロングシュートの順に高かった。攻撃がミドルシュートで終了した場合、相手のカウンター攻撃局面は 1 次速攻、2 次速攻および 3 次速攻が有意に多く、遅攻が有意に少なかった。カットインで終了した場合、3 次速攻が有意に少なかった。サイドシュートで終了した場合、2 次速攻が有意に少なく、遅攻が有意に多かった。7m スローで終了した場合、1 次速攻、2 次速攻および 3 次速攻が有意に少なく、遅攻が有意に多かった。シュート成功率がミドルシュートよりも低いロングシュートにおいて、相手のカウンター攻撃局面に 1 次速攻が多いという結果は認められなかった。このことは、ロングシュートではボールを持ったバックコートプレイヤーが 6m～9m のエリアに侵入することなく攻撃を終え、ボールを持っていない残りの 2 人のバックコートプレイヤーも 6m～9m のエリアに侵入することが少ないため、たとえ相手の 1 枚目のディフェンダーが積極的に飛び出せたとしても、3 人のバックコートプレイヤーが相手のカウンター攻撃に備えて素早く守備に転じることができることが理由であると考えられる。

⑷ 攻撃が 1 次速攻で終了した場合、攻撃成功率、シュート成功率が最も高く、ミス率が最も低かった。攻撃が 3 次速攻で終了した場合、ミス率が最も高く、攻撃成功率、シュート成功率が最も低かった。攻撃が 1 次速攻で終了した場合、相手のカウンター攻撃局面は 1 次速攻が有意に少なく、遅攻が有意に多かった。2 次速攻で終了した場合、3 次速攻が有意に少なかった。遅攻で終了した場合、3 次速攻が有意に多く、遅攻が有意に少なかった。

【結論】

相手のカウンター攻撃において失点を防ぐためには、攻撃をゴールで終えること、テクニカルミスとミドルシュートを減らすこと、1 次速攻を積極的に狙うことが重要であると実践現場に提言できる。